九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古代漢語における場所を表す疑問代名詞の歴史的変遷

西山, 猛
九州大学大学院言語文化研究院 : 助教授 : 中国語学

https://doi.org/10.15017/9590

出版情報：中国文学論集. 34, pp.15-26, 2005-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

古代漢語における場所を表す疑問代名詞の歴史的変遷[1]

西　山　　猛

０．議論の前提として

古代漢語の代名詞には、疑問を表す疑問代名詞というものがある。それは人、事物、場所等に分けられるが、今回はその中でも、場所を表すものとしてはどのようなものがあるのかを考えてみようというのが、本稿の目的である。

場所を表す疑問代名詞は「何」であり、それが前置するのが一般的であると考えられている。例えば前漢司馬遷撰『史記』には以下のような用例がある。

⑴　大宛聞漢之饒財，欲通不得，見騫，喜，問曰：「若欲何之？」(大宛は漢が物産豊富であると聞き、交わりを結ぼうとしてこれまで叶わなかったが、張騫を見ると喜んで聞いた：「お前はどこに行きたいのか？」)（『史記』巻123「大宛列傳」p.3158)

ただこの「何」という語彙自体は、例えば事物等を表す場合にも用いられ、場所を表す専用の形式ではなかったようである。そのことについては詳しくは後述することにする。

このうち上古漢語の疑問代名詞全般に関しては、貝羅貝、呉福祥2000に詳細な記述がある。我々にとって有益な指摘も多く参考にすべきものではあるが、ただその枠組みを見てゆくと従い難い点も少なくない。例えば該論では甲骨文、金文等を上古前期漢語としているが、この点については太田1984序においてつとに指摘したように、それを上古中後期漢語とともに上古漢語と呼ぶことが適当かどうか疑わしいほど、前期と中後期の文法的な差異は明確であり、これに反し、中期と後期との一線はかすかであるといっていい程差異は明確ではない[2]。私は文法体系を論じる際には、甲骨文、金文、『書經』等の文体は「太古漢語」として、古代漢語の枠組みから取り外すべきなので

はないかと考えている[3]。本稿では春秋戦国期以降の『論語』等を始めとする文献を古代漢語の資料とすることにする。

次に考慮すべき論点として、戦国秦漢を中心とした出土資料の問題がある。文法現象という点から論じたものとしては例えば魏徳勝2000があるが、こういった論考には誤字脱字等の文字校勘の問題がつきまとわってくるのをどうしても避けがたいと私は考えている。こういった資料を語学の観点から見た際には、文字学或いは訓詁学の今一歩の蓄積が必要なのではないだろうかということである。よって私は今のところ文法現象の論証に関してはこういった出土資料は扱わないことにしたい。

またその他問題とすべき事象として、後漢以降現れてくる漢訳仏典の問題がある。その点について論じたものには魏培泉2004等がある。こういった論考は、思想内容はもちろんのこと文体もたいへん興味深いものではあるが、ただこういったものは該書 p.6においても指摘されるように、文体の不自然さ等が目立つという現象が起きることを認識しておかなければならない。即ち漢訳仏典は、まずは仏典として一個の別なジャンルとして取り扱う必要があるのではないかということである[4]。このことについては別に詳しく論じたい。

その他例えば『搜神記』等の志怪小説をどう扱うか、についてであるが、こういった資料はすべて散逸してしまったテキストを後世輯佚したという経緯があり、テキストの信頼性には大きな問題がある。よってこういった観点から考えてこの種の資料はひとまず措いておくことにしたい。

以上の前提を踏まえて本稿では、古代漢語の資料を春秋戦国期『論語』以降の歴史・思想方面の十分な校訂を経た文献に限定して、以下のことを論じる。即ち⑴上古漢語としてどういった文献が疑問代名詞に関する一般的な資料として用いられるのか、⑵中古漢語としてはどのような資料によってどのような形式へと変化することとなったか、という２点である。今回はひとまずそのおおまかな枠組みについて概観してみることにしたい。

１．春秋戦国期の資料について

本稿では古代漢語のうち上古漢語の資料として、まず春秋戦国期の文献について例を挙げてみることにする。

春秋戦国期の文献については『論語』を始めとしてさまざまなものがあるが、今回場所を表す疑問代名詞ということに関して文献を見てゆくと、どういったものを言語資料とすべきなのかが見えてくる。

資料としては『論語』及び『孟子』、『荀子』及び『韓非子』、『春秋左氏傳』及び『國語』等がある。[5] そのうち例えば『論語』を見てみると、該書では「焉」「奚」「惡」といった語彙が場所を表す疑問代名詞になる。例えば「焉」字については、全90例中、場所を表す疑問代名詞は６例である。そのうち２例を挙げれば以下の通りである。

⑵　視其所以，觀其所由，察其所安。人焉廋哉？（その行う由来を見、その行う経過を観察し、その行う結果を見極める。そうすればその人はどこにかくれるか？）（『論語』巻２「爲政」10、p.53）
⑶　直道而事人，焉往而不三黜？（道を曲げずに人に仕えれば、どこに行けば三度避けられないことがありましょうか？）（『論語』巻18「微子」２、p.715）

『論語』における疑問代名詞の形式は、ここで明らかなように目的語の「焉」が動詞に前置されるという形式である。ただ注意すべきことは、この「焉」という語彙自体が場所を表すというわけではないということである。文全体の意味から考えてある場面においてはそうなるということである。
このように上古漢語においては、形式的には場所を表す専用の疑問形式はなく、例えば「焉」の用例のうち幾つかが文全体の意味から考えて場所を表す形式となっているのである。その他例えば『韓非子』でも状況は同じで、疑問代名詞については「焉」「奚」等の字を用いている。
ただ残念ながら、こういった語彙は後の秦漢等の文献資料には継承されていないと思われる。[6] 後世に伝えられた疑問代名詞の形式は『左傳』等に見られる「何」「安」の形式である。
『左傳』における「何」字は全742例であるが、その中で例えば場所を表す形式「何之」「何鄉」についてはそれぞれ以下の1例がある。

⑷　襄公適楚矣，而祖以道君。不行，何之？（襄公が楚に行ったので、今度は祭りをして主君を案内するのだ。そこに行かないで、どこに行くのか？）（『左傳』「昭公七年」p.1287）
⑸　國險而多馬，齊、楚多難；有是三者，何鄉而不濟？（国は守りが固く馬も多く、また斉や楚には争いごとも多い：この三つがあれば、どこに向かってもうまくゆくはずだが？）（『左傳』「昭公四年」p.1246）

その他「安」を用いた形式も存在する。「安」の方は計89例あり、例えば

「安歸」「安傅」を見ればそれぞれ１例ずつある。

⑹　君死，安歸？ 君民者，豈以陵民？ 社稷是主。(主君が死んで、どこに帰るのか？ 君民である者が、どうして人々の上に立つことができよう？ 社稷こそを主とするのである。) (『左傳』「襄公二十五年」p.1098)
⑺　皮之不存，毛將安傅？ (皮が残っていなければ、毛はいったいどこに付着しておくことができようか？) (『左傳』「僖公十四年」p.348)

このように『左傳』においては、「何」「安」といった形式が場所を表す疑問形式として用いられていることがわかる。そしてこの形式のうち特に「何」の形式が、後の文献においても広く使用されるようになるのである。そのことについては以下順を追って述べてゆくことにする。

２．漢代の資料について

漢代になると、場所を表す疑問代名詞については、戦国期『左傳』に現れた「何」を前置詞とする形式を継承するようになってくる。一例として劉向『説苑』を見てみると、例えば「何之」等の形式があり、こういったものが前漢におけるごく一般的なものだったことがわかる。しかしここで問題になるのは、漢代においてまたそれとは違った形式が新たに現れてくるということである。ここではその状況について概観してゆくことにしよう。

今回はその言語資料として司馬遷撰『史記』を扱うことにする。

まず『史記』に扱われている時代について見ることにする。該書で扱われている時代はいわゆる五帝の時代から司馬遷と同時期の前漢武帝の時代までの通史である。それが今日まで『史記』を語学的に分析できるか否かの大きな問題点となってきた。しかし私は司馬遷と時代の近い部分をその言語資料とするのであれば、語学的にも取り扱うことが可能ではないかと考える。そこで本稿では、漆権1984を参考にして以下の部分を「『史記』秦漢部分」と名付けて、その言語資料にすることにしたい。

巻６～巻12、巻48～巻60、巻87～巻104、巻120～巻125

２．１．前漢の資料－其の一

「『史記』秦漢部分」において場所を表す疑問形式は、まず『左傳』等を継承した「何」を前置する形である。

「何」字を用いた例は464箇所あるが、例えば「何之」「何從」という場所を表す疑問形式を見れば以下それぞれ１例である。(7)

⑴　大宛聞漢之饒財，欲通不得，見騫，喜，問曰：「若欲何之？」(『史記』「大苑列傳」)
⑻　太后曰：「帝倦矣，何從來？」(太后は言った：「帝は疲れていらっしゃいますが、どこからいらっしゃったのですか？」) (『史記』 巻49「外戚世家」p.1982)

このように「『史記』秦漢部分」には「何」を前置した形式が一般的である。
また「『史記』 秦漢部分」には、同じく 『左傳』 を継承した「安」を前置した疑問形式もある。「安」字364例中、例えば「安在」で検索すれば合計6例で、すべて場所を表す疑問形式である。２例を挙げる。

⑼　項王曰：「沛公安在？」良曰：「聞大王有意督過之，脱身獨去，已至軍矣。」(項王は言った：「沛公はどうこにいるのか？」張良は言った：「大王は過失を咎める意思があると聞きましたので、一人で立ち去ったところで、もう軍に至った時分でしょう。」) (『史記』 巻7「項羽本紀」p.314)
⑽　項王見紀信，問：「漢王安在？」信曰：「漢王已出矣。」項王燒殺紀信。(項王は紀信を見て問うた：「漢王はどこにいるのか？」紀信は言った：「漢王は既に脱出しました。」そこで項王は紀信を焼き殺した。) (『史記』 巻７「項羽本紀」p.326)

このように上古漢語における場所を表す疑問形式は、『左傳』 や「『史記』 秦漢部分」等に見られる「何」「安」を前置する形式が基本的なものとなるのである。

２.２. 前漢の資料－其の二

ところでこの「『史記』 秦漢部分」において注目すべきは、場所を表す疑問形式に新しい形式が生み出されるということである。その形式とは「何所」のように、疑問代名詞「何」に名詞「所」が続く形である。
ただそのことを記述する前に、述べておかなければならないことがある。それは「『史記』 秦漢部分」には、「何所」の形式のうちそれ以前の文献例えば 『左傳』 等にも見られるような従来の形、即ち「何＋所 『動詞』」というように、「何所」にさらに動詞が後置されるものがある、ということである。

「『史記』 秦漢部分」においては「何所」自体の用例を見てみると計６例あり、そのうち５例が「何所」に動詞が後置される形である。１例を挙げれば以下の通りである。

⑾　今大王誠能反其道：任天下武勇，何所不誅！以天下城邑封功臣，何所不服！（今大王がまことにこの項王の道とは逆の道を行い、天下の武勇の士に任せれば、誅滅できない者などありましょうか？ 天下の城邑を功臣に封地としてお与えになれば、征服できない者などありましょうか？）（『史記』 巻92「淮陰侯列傳」p.2612）

このように「何所」の従来からの形式は、「何」に「所『動詞』」が後置する形、即ち「何＋所『動詞』」の形であり、なおかつ場所を表さないものも多い。例えばこの場合では指しているものは人物である。しかし「何所」の次の例は、それとは異なり場所を表す疑問形式である。その1例は以下のごとくである。

⑿　人皆以爲不治産業而饒給，又不知其何所人，愈信，争事之。（人々は皆彼が産業を治めているわけでもないのに多く人に与えており、またどこの人かわからなかったが、ますます信用し、争って仕えた。）（『史記』 巻12「孝武本紀」p.454）

この例は、「何所＋人」と続くもので、これまでになかった形式である。この「何所人」は「どこの人」という意味で、明らかに場所を表す専用の疑問形式「何所」からなっている。このように「『史記』 秦漢部分」には新しい形式の「何所」という例が出現するのである。(8)

この「何所」という形式から見て、「『史記』 秦漢部分」において、私は既にそこに中古漢語的要素の萌芽がみられるのではないかと推測する。(9) そしてその形式は次の後漢においても続いてゆくことになるのである。

２.３．後漢の資料

次の後漢においても「何所」の形が現れることになる。しかしいうまでもないが、すべての文献にこの「何所」の形式が出現するわけではない。例えばこの時期の主要な資料の一つに班固撰『漢書』があるが、該書に現れる一般的な形式は『左傳』を始めとする「何」を前置する「何『動詞』」であり、原則として「何所」の形式は用いない。(10)

それに対して、例えば王充『論衡』は、その斬新な思想内容もさることながら、この「何所」という表現形式についてもそれを積極的に用いており、いわゆる中古漢語の萌芽としての役割を果たしているといえる。

ただ『論衡』全体から見れば、「何」を動詞に前置する形式の方が一般的である。「何」字1258例のうち、例えば「何在」について見れば、11例存在する。2例を挙げれば以下の通りである。

⑿　且五行之氣相賊害，含血之蟲相勝服，其驗何在？（そのうえ五行の気が互いに賊害し、血の通っている動物が互いに勝服するという、その証はどこにあるのか？）（『論衡』巻14「物勢」p.148）

⒁　其母日：「今虵何在？」對日：「我恐後人見之，即殺而埋之。」（その母が言った：「その蛇は今どこにいるのですか？」子供は答えていった：「後で人が見るといけないので、そこで殺して埋めました。」）（『論衡』巻20「福虚」p.267）

それに対して名詞句として用いられる「何所」は、15例のうち２例が新しい形式である。１例を挙げる。[11]

⒂　扶桑細柳，正在何所乎？（扶桑と細柳は、本当はどこにあるのだろうか？）（『論衡』巻32「説日」p.497）

このように『論衡』において、「『史記』秦漢部分」から受け継がれた「何所」という形式が用いられているのである。

このように「何所」の形式は、漢代およびそれを模倣した文章においてはいくらか用いられたようであるが、正式な形式としては残念ながら後世には引き継がれなかったと思われる。そして次の魏晋南北朝になると、さらに新たな形式が生まれて来ることになる。

３．魏晋南北朝の資料

次に魏晋南北朝の文献資料を見てみることにしよう。この時期の全体の状況を見てみると、やはり「何」が動詞に前置する形式の方が一般的である。例えば典型的な例として、西晋陳寿撰『三國志』を見てみると、その形式はやはり「何」を動詞に前置する形式がほとんどで、「何」に「所」等を後置して名詞句を作る形式は原則として見られない。[12]

それに対して、この時期にはまた新たな形式が出現することになる。その資料として、今回は南朝劉宋劉義慶撰『世説新語』を見てみることにする。

まず『世説新語』にも上古漢語より用いられている「何」が動詞に前置する形式が存在する。「何」字全430例中、例えば「何在」で検索すると全部で５例存在することがわかる。２例を挙げると以下のごとくである。

⑯　簡文在暗室中坐，召宣武，宣武至，問上何在。(簡文帝は暗い部屋の中に坐り、宣武を召すと、宣武はその部屋にやってきて、主君はどこにいるか尋ねた。)（『世説新語』巻２「言語」60、p.67）

⑰　須臾，和長輿來，問：「楊右衞何在？」客曰：「向來不坐而去。」(しばらくすると和長輿が来て、問うた：「楊右衞はどこにいるか？」客の一人は答えた：「さきほど席にもつかずに立ち去りました。」)（『世説新語』巻５「方正」12、p.163）

それに対して、「何所」という形式は18例あるが、すべて「何＋所『動詞』」の形式であり、「何所」という名詞句のものは１例もない。

その形式とは別に、『世説新語』には「何處」という形式が現れる。全部で９例あり、すべてこの形式である。２例を挙げる[13]。

⑱　桓玄既簒位，將改置直館，問左右：「虎賁中郎省應在何處？」(桓玄は位を奪ったその後、制度を改め宿直所を置こうとして,そばの者に尋ねた：「虎賁中郎省はどこに置くべきだろうか？」)（『世説新語』巻２「言語」107、p.88）

⑲　王問：「何處來？」云：「從師家受書還，不覺日晚。」(王は問うた：「どこから来たのだ？」その男は言った：「先生のご自宅でのご講義を受けての帰りですが、知らぬ間に日が暮れてしまいました。」)（『世説新語』巻３「政事」10、p.95）

このように、『世説新語』においては、『史記』や『論衡』で用いられた「何所」という形式は消え、その代わりに「何處」という形式が生まれたのである。そしてこの段階で中古漢語の場所を表す疑問形式は完成を見ることになるのである。そしてこの「何處」という語彙は、品詞としては一個の疑問代名詞と見ることもできると考えてよさそうである。

4．唐代の資料について

この「何處」という形式はその後広範な文献において使用され、近代漢語においても、例えば明代『西遊記』等の資料において広く用いられる。そして現在においても、書面語等において用いられることがある。ただ近現代漢語においては「那裡」等の語彙が一般的になることになるが、その詳細についてはまた別の機会に述べることにしたい。

ところでこの「何處」という形式は、古代漢語としていつ頃まで主に使用されたかについてはよくわからないが、いくつかの文献においてはこの「何處」が積極的に用いられていたようである。今回は、その中でも初唐張文成作『遊仙窟』について見ることにしたい。

この作品には「何所」の例は一つもない。それに対して「何處」の方は計11例ある。２例を挙げれば以下のごとくである。

⑳　下官笑曰：「十娘機警，異同著便。」十娘答曰：「得便不能與，明年知有何處？」(私は笑って言った：「十娘さまはお察しが早く、違いをおわかりでらっしゃる。」十娘は答えて言った：「都合を得た時にうまくやらなければ、来年になったとしてどこでやるというのでしょう？」)（『遊仙窟』p.19)

㉑　十娘因在後，沈吟久不來。余問五嫂曰：「十娘何處去，應有別人邀？」(十娘は後ろに下がって、ためらってなかなか来なかったので、私は五嫂に尋ねた：「十娘さまはどこに行ってしまわれたのです？ 他の人のお招きでもあったのですか？」)（『遊仙窟』p.21)

このように『遊仙窟』には、疑問代名詞「何處」による形式が示されている。場所を表す疑問形式としては「何處」が最終的なものとなったのである。

5．本稿のまとめとこれからの課題

以上述べてきたように、場所を表す疑問形式は、春秋戦国期においては「焉『動詞』」等の疑問代詞が動詞に前置する形式、及び「何『動詞』」等の形式が存在したが、「何『動詞』」等の形式の方が一般的な形式となった。ただしその形式は場所を表す専用のものではなかった。

しかしその後、漢代においては名詞句「何所」という形式が発生し、その

後魏晋南北朝において「何處」という形に代わり、最終的な完成を見たというわけである。その形式は場所を表す専用のものである。

それでは次の近代漢語においてはどのような形式になったのであろうか。一言で言えば、例えば敦煌変文においては「何所在」、「甚処」、「那裏」等の複雑な形式が現れ、その後『大唐三藏取經詩話』『三國志平話』等を経て「那裡」という形式に収束していったと考えられる。この問題についてはまた稿を改めて論じてみたいと考えている。

(2005年９月)

注

（１）本論は一般向けに書かれた西山2002をもとに研究論文として考察を行ったものの一部である。

（２）この古代漢語の時期区分の問題については西山2004においてその一端を指摘したことがある。

（３）厳密に言えば、「太古漢語」という名称そのものも検討すべき論点であることを付言しておく。それから古代漢語の下限をどの資料までにするかということもたいへん重要な問題であるが、この点についても後に述べる。

（４）この点については、陳文傑1999が漢訳仏典の場所を表す指示代名詞について述べている。この論文には、例えば「此中」「是中」「彼中」の用法等が述べられていて、これからの研究に益することが多いと思われる。

（５）『論語』を始めとして、春秋戦国期の文献が実際にいつ成立したかということはよくわかっていない。この時期のものは、まずすべての文献が現在のような一冊の書物（実際には竹簡等）として存在していたか疑問であるし、またこの時期の書物の多くは後の焚書等による消失という経緯を被ることになる。さらに読者層が現在とはかなり異なっていたであろうということも考慮しなければならない。実際に文章として成立した時期、それから現在のようなテキストとして定着した時期、それぞれを慎重に検討していかなければならない。

（６）「焉」「奚」等は後世になるともっぱらいわゆる「反問」を表す形式にのみ使用されるようである。よってこの種の形式は他の「何」等に代替されてゆくようになったと私は推測している。

（７）『史記』「外戚世家」の例は牛島1967、p.331を参照にした。なおこの例は厳密に言えば褚少孫の補遺の部分といわれているが、言葉の変化の観点からすれば、司馬遷と時代はさほど変わらないと言っていい。後のいくつか

の例も同様である。

(8) 一方「安」の方は、「安＋所『動詞』」の形式はあるものの、「安所」で終わる名詞句のものは見られない。これはその後の文献においても同様である。

(9) 或いは「上古漢語」の一つの段階において、新しい「何所」の形式が生まれたと考えるべきなのかもしれない。ただ「『史記』 秦漢部分」の用例は全体から見れば１例と少数である。

(10) 厳密に言えば、『漢書』 にも「何所」に名詞が続く例、及び「何所」で句が終わる例、それぞれ1例ずつあるが、いずれも 『史記』 を踏襲したもの及び当時の四字句の歌謡であり、『論衡』 におけるような記述の文章ではない。ちなみに 『論衡』 では、『史記』 を踏襲した箇所については「何許」を使用している。

(11) もう１例は、「其下之南，有若蓋之莖者，正何所乎？」(その下の南に、蓋の茎のようなものがあるのは、いったい何であろうか？) (『論衡』 巻32「説日」p.489) である。この「何所」は、意味から考えれば「何」、或いは「何物」となるべき箇所である。太田1988、p.99には、事物を問う「何所」の例を挙げているが、そこに挙げてある例は、上古漢語に典型的な形、即ち「何＋所『動詞』」の形式、およびその後の志怪や仏典のものである。「何」から「何處」へ変遷する途中の段階として、「場所」以外のものをも表した例とみるべきであろうか。今はそのままここに挙げておくことにする。

(12) 厳密に言えば 『三國志』 巻12「魏書」「毛玠傳」において、鍾繇の言葉として「以何日月？ 於何處所？」(いつ何時か？ どこにおいてか？) の１例があるが、ここは相手を詰問する際に用いる当時の決まった四字句の言い方であり、一般的なものとは考えられない。

(13) 『世説新語』 には、「何處＋『動詞』」のように動詞が「何處」に後置する例がある。後の 『遊仙窟』 にも同様の例が見られる。ただこの形式は古代漢語での典型的な形式「何＋『動詞』」とは明らかに異なり、むしろ次の近代漢語へと繋がってゆく問題であると思われる。詳しくは楊克定1992を参照。

テキスト

『論語正義』 ([清] 劉寶楠撰、中華書局1990年本)
『春秋左氏傳注』 (楊伯峻編著、中華書局1981年本)
『史記』 ([漢] 司馬遷撰、中華書局1959年本)
『論衡校釋』 ([民国] 黄暉撰、中華書局1990年本)

『世説新語校箋』（徐震堮著、中華書局1984年本）

「遊仙窟」（劉堅校録）、『近代漢語語法資料彙編（唐五代巻）』（劉堅・蔣紹愚主編、中華書局1990年本）所収

参考文献

牛島徳次 1967 『漢語文法論（古代編）』（大修館書店）

漆権 1984 「『史記』中的人称代詞」『語言學論叢』12、pp.171-193。

太田辰夫 1984 『古典中国語文法（改訂版）』（汲古書院、1964年初版）

太田辰夫 1988 『中国語史通考』（白帝社）

楊克定 1992 「從『世説新語』、『搜神記』等書看魏晋時期動詞“來”、“去”語義表達和語法功能的特点」程湘清主編『魏晋南北朝漢語研究』（山東教育出版社）pp.240－275。

陳文傑 1999 「從早期漢譯佛典看中古表方所的指示代詞」『古漢語研究』４期、pp.15－20。

魏德勝 2000 『「睡虎地秦墓竹簡」語法研究』（首都師範大学出版社）

貝羅貝、呉福祥 2000 「上古漢語疑問代詞的發展與演變」『中國語文』４期、pp.311－326。

西山猛 2002 「中国語文法の歴史的なうつりかわり」九州大学中国文学会編『わかりやすくおもしろい中国文学講義』（中国書店）所収、pp.268－278。

魏培泉 2004 『漢魏六朝稱代詞研究』（『語言暨語言學』専刊甲種之六、中央研究院語言學研究所）

西山猛 2004 「古代漢語文法研究における時期区分の再設定」研究代表者九州大学石汝杰、平成14－15年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ－２）研究成果報告書『「呉語読本」音声データの作成と公開』論文・翻訳編（第一冊）所収、pp.25－29。